

氏名	長岡 由紀子
学位の種類	博士（体育学）
学位記番号	第10号
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位授与年月日	平成24年1月18日
学位論文題目	体育学における臨床心理学研究の意義
論文審査委員	主査 教授 志村 正子
	副査 教授 西菌 秀嗣
	副査 教授 森 司朗

論文概要

本研究では、体育学の中で特にスポーツに関する人の心理的側面を対象とする際により実践的に取り組む方法について、臨床心理学研究の方法論を取り入れて検討を行った。

臨床心理学研究は対象に関わる実践活動を通して研究を行うことが目的とされているため、スポーツ現場での実践を生かすために、これまでもスポーツ心理学領域において臨床心理学研究の方法論は用いられてきた。しかし、これまでは臨床心理学研究の枠組みにスポーツ現場における事象をあてはめて用いられていたため、スポーツ現場という身体活動を伴う経験的な側面を反映するような知見は得られてこなかった。そこで、本研究では、主にスポーツの競技に関する事例研究を行うことで、スポーツ独自の知見を考察し、体育学における臨床心理学研究を行うことの意義について提示することを目的とした。

そして、まずスポーツにおける事例の独自性についての検討を行った（研究1）。そこでは、事例で示された事象を意識水準とは異なる水準をも含めた水準で捉えることは事象を多義的に捉えることになることが指摘された。また、事例という手法で対象を個別に検討することは体験知を導くことになりその普遍性が期待されることが示された。次に、無意識の視点から実践的な関係性を捉える視点について検討を行い（研究2）、関係性を表面に表れる感情の変化で捉えず互いの距離感の変化に着目することや、関係がないと思われる事柄を考慮することが、より関係性の本質を捉えることになることが指摘された。最後に、身体の象徴的な解釈のあり方に関する検討を行った（研究3）。身体の象徴性を多義的に捉えることは体験的な捉え方をすることであり、これにより輻輳的な視点が生みだされ、より実践的な知見を期待することができることが示唆された。

以上の結果に共通して示されたのは、①事象を複数の視点から

多義的に捉えることの重要性、②体験に基づく知見の重要性であった。これらが示していることはすなわち、事象を多角的な視点から立体的に捉えることが、身体活動によるスポーツ現場を理解する上では有用であるということであった。

よって、実際にスポーツ現場に関わる人（選手や指導者など）は、自らの「試行錯誤の過程」を形成するような多義的で体験的な知見が得られることが最も重要であると考えられた。その意味において、スポーツ現場から得られる多義的で体験的な知見が複数同時に得られるということが、臨床心理学研究の方法論から得られたスポーツ独自の知見であると捉えられた。

以上の考察を通して、身体活動に基づく応用科学とされる体育学は、対象となる事象に研究者が関わりながら知見を得ることが、その実践には重要であることが改めて認識されることとなった。それは、事例研究という個人を対象とすることで得られる知見や無意識の視点からの知見、そして、身体を体験的象徴的に捉えることによる知見など、幅広い知見を提供することになると考えられたためである。そして、この幅広い知見は競技者のみならず、指導者をはじめとした体育学に関わる者が、自らの問題を解決する過程を導く知見となることが期待される。その観点において、体育学において臨床心理学研究を行うことがその発展に大きく寄与することになることが示された。

論文審査の要旨

本研究ではスポーツの競技に関する事例研究を行い、実際に大陸横断ウルトラマラソンの現場に介入し、スポーツ・体育学における臨床心理学研究の意義について考察した。論文は事象を複数の視点から多義的に捉えることの重要性、体験に基づく知見の重要性を示し、事象を多角的な視点から立体的に捉えることが、身体活動によるスポーツ現場を理解する上では有用であることを捉えた。よってスポーツ選手や指導者等には、自らの「試行錯誤の過程」を形成するような多義的であり体験的な捉え方が重要であり、複数同時に得られる身体の象徴的理解が様々な問題解決の過程を導くという独自の視点から臨床心理学研究の意義を捉えた。